義大利雜誌

第貳號

本誌目次

(社說)○義太夫と國家の關係○(古曲)淨瑠璃姫の十二段(承前)小野の通女○(同)とら御前待宵のうらみ○(同)心中江戸三界近松翁の扳書○(寄投)義太夫雜誌發行の祝○(同)近松翁の戲文評(承前)惰農子○(同)義太夫作がらの事翼々居士○(同)俳句見立評春曙山人○(同)小川亭にれきて笹木寸長○(同)團平は慷慨家あり義曲野史○演藝奬勵會の一口評七文字屋微笑○(饒舌)竹本越子の事○竹本清玉の事○(雜錄)孫福齋の觸書牧野竹園○(同)播磨樣とシェークスピヤ翼々居士○(同)竹本綾之助に就て日本橋の住人○義太夫に關する「イウフホニー」の事釣深亭素樂○演戲作拵の事岡田壽樂○淨瑠璃外題集加藤尾花○試に本誌の前途を筮す不住居士○義太夫語りの飲料釣深亭主人○つねくゝ草「三郎が笛」「熊谷直實遁世」「秀吉公の御目のひかり」「辨慶」「贔負」峰の家主人○(雜報)大隅太夫、鶴澤友次郎、京の淨瑠璃大會、新呂の又頓智、醫者の昔は義太夫語り、其外○餘興曲子三絃の友(ゼヽいつ廿七句)

○貸本の廣告

政治小說歷史法律醫書隨筆傳記等可成安く貴需に應す
駿河臺西紅梅町六番地諸新聞取次所　衷和堂

書畫文案意匠　紹介者峰の家　應需　松本江西

社告

第一號ゝ編輯不整且校正も不行届にて誤殖等多き段爰に謝す又「上るり十二段」の假名づかひの相違ゝ本の儘なれゝ此段問合の人に告ぐ

義太夫雜誌第一号に紫山人と云ふ投書家あり爲めに辱知の諸君より御問合せの向も御座候得共其人ゝ小生も同名異人に付き御斷り申上候

讀賣新聞社　堀紫山人

京橋區南紺屋町十九番地
技術の巧なると値の廉なる他に比類なし　得兩館活版印刷所
神田地方は義太夫雜誌社へ御注文あるも差支あし

義太夫雜誌　第貳號　明治廿六年二月廿八日　發兌

夕〇餘興曲子三絃の友（ぞゝいつ廿七句）

義太夫雑誌　第貳號

明治廿六年二月廿八日　發兌

尾張名代に比類なし　名古屋舗　日原所
神田地方は義太夫雑誌社へ御注文あるも差支なし

論說

義太夫と國家の關係（承前）

東洋に君子國の稱ある日本い彈丸黑子の國といいへ君臣の道の正しきことい世界廣しといへども古來他に例なきは中華と稱へ自ら尊む支那人も之を羨み文明を以て誇る歐州人も之を賞歎せさるはなし。實に、祖宗より百二十餘代の帝王其系統を一線にひき賜ふこと豈に偶然といふ可や。背逆の臣時あり興るといへとも正義毎に多數をしめ其目的を達する能いす。尊氏の如き奸嬖專横も正系の帝王を立るにあらされい自ら將軍の地位に安する能いず。德川氏一たび大亂を治め其威海內に振ふにあたり大に儒官を召て周武紂王を討の理由を講せしめしも。曾て秀吉に事へ玄諸侯の不平を憚り。秀頼を亡せしは弑逆にあらずとの云ひわけに汲々たりしものなり。日本國民が順逆の義理を懷ふの切なることい此に因て見るべきなり。又如何なる豪雄智將といへども一度名分を過るときは衆望を傷ふを以て已の神心を腦すの甚きことい此に因て知るべきなり。

斯に於て銳敏の家康は熟々淸盛頼朝足利氏等の既往の歷史を顧み。武臣の天下失ひ易きを知り。別に方略をめぐらし天海の如き僧侶を以て顧問とおし。忠義に關係なき佛道を崇敬し。不德の君は滅亡するの唐土の歷史を誨むと。儒者を擧げ。聖堂を建て。庶民を撫育し。加ふるに刑罰を重じ威嚴を示せしより。衆人皆其威に怖れ暗に其政略に化せられ。天下は殆ど德川幕府の天下の如くなり。天皇は人よりも寧ロ生神として敬ひ奉るも敢て之を譏らず。却て敬して遠くるの機會とな

し。可成人間に關係少なき樣におしたる樣い俗に幕府を天下樣と云ひ。天子を禁裏樣と云ひしを見て思ひ合すべし。

斯の如くして意の如くに勢力を得るも。幕府い先の失敗者の如く決て天皇の癈立等を謀るに至らず。只官皇室の尊嚴をそぎ。己の威權を加ふることのみ之を力めたるより。春臻るも京の都は東の秋よりも淋ゑく。東の城は諸侯の昇降日々に繼るが如くなるも京の禁園は常に幽鳥の啼くを聞くのみ。

當時諸侯い幕府を恐るゝ嚴父の如く。皆爭ふて之に諂ひ競ふて之に賄賂するより。幕府の驕奢は日を逐ふて旺にゑて日光其他に私の廟祠を營も公に諸侯に其材料を募る。其名い奉獻寄進と雖も其實賦課に異なることなし。之に反して至尊の天皇い祭祀の資料をも欽ぎ賜ふこと屢ゝありゑとい誠に歎すべきの至ならずや。

此時に當り民間また尊王愛國の士おきにあらずと雖も皆其意志を發表ゑ。其赤心を貫くの手段おきに苦しめり。讀者諸君よ新聞や演說や公會の設け繁多なる今日を以て。うのかみを推量する莫かれ。

義太夫謠曲の發達は此至難の日にあり。而し至重の責任を帶びたる者あり。初め虎屋薩摩太夫は幕府の認可を得て大阪に櫓目附にせられ。落魄の風雅人を集め。傀儡の戲を開き。愚婦幼弱を教誨するを勉めし位なれども京都の人井上市郎兵衛の如きい之を以て足れりとせず。一意以て勤王の志を貫かむと大に盡せしことの効ありて。竟に叅内の敕免を蒙り。自ら鍛錬の謠歌數曲を叡聞に達するの榮を得しい。實に寛文二年二月のことあり

市郎兵衛一介の市民として此榮を受けしは。此人の腦裏に將來幾許の望を含蓄せしめしや知るべからず。亦其幽閑の日に於て九重深き所に鄙俗の行路幾多の艱難あるや又其艱難の結果は如何ある幸福を迎ふの望ある

や。又國家に不義君主に不遜の者は如何に惡く酬ゆるか。眼前見るが如くに謠ひ澄したるときゝ。至尊の叡慮を動かせしことまた幾許なるや言論運動の自由ある今日に生活する我等が測り知る所にあらざるなり。徳川幕府の起礎以來大聲尊王建忠の意志を鳴らゝ或ゝ清盛におぞらへ。或ゝ時政にことよせ。暴政不遜の結果を擧げ。暗に幕府を諷したる者は此市郎兵衛を以て嚆矢とす（市郎兵衛後に大和の椽を經播磨の少椽を受領す。是に續て義太夫あり。淨瑠璃を一變し老弱貴賤等の言語を交せ今の義太夫の躰をなす）近松氏大に之を助け。更に忠義の著作を加へ。又大に謠曲の面目を更ひ。寶暦の頃に至て淺田一鳥等の作數多あるも。皆故人の操を變することなし今日の義太夫謠曲を聞く人爰に注意せずして。多くは女義太夫の艶姿を珍で。或は誰の聲はつやあるとかなきとかを論するもの多し。故に大夫と稱し謠曲を以て生意する者も鄙賤無識の聽衆に愛顧せらるゝことの經濟なれば。淫奔の事あるも不義の事あるも。其作の如何を問ゝず。譜節のはでやかなるものをのみ愛玩するの傾きに流るゝ。如何にも歎息の次第なり。況して紳士の技曲を弄する人杯の妓婦輩の膝に枕し謠咏することを無上の樂とするは。故人の精心に照して更に幾多の恥辱ありや。

義太夫謠曲家に續ひて後に民間に尊王の大義を說き廻り。運動なたる人數あり。即ち高山彦九郎氏の如きも平田篤胤の數百部の著述あるも。賴襄の外史の編成あるも。其趣は異なれども。盡す所は一途にして皆公然其赤心を發露するに由なく。或ゝ古來の國躰を引きて歷史編成にことよせ。或は詩歌に當時の豪雄武將の每に不遜に流るゝことを諷したるものなり。而して徳川幕府以來此の大義の運動に率先したる者ゝ。我義太夫謠曲家なりと言も敢て誣言にあらざるべし。朝廷も亦其赤心のある所をよみし賜ひしの證據にゝ三百年來勸

善懲悪の事の故を以て参内せんものゝ僧侶を除けゝ。黒住宗忠と義太夫謡曲家の二ッのみ。斯く説き来るときゝ或ゝ讀者諸君の豫想に相反することあるやも知るへからすといへども我は決て誣言にあらさるを信すれゝあり。

（以下續出）

古曲

上るり十二段（承前）

小野通作

二たんめ

はなそろへ

うのゝち御さうしは其ころかねうり吉次と打つれたちあつまをさしてくたらせたまへはほとゝなく三川の國やはきのしゆくにつきたまふやよひおかバのころおるにやうはいこをりのはるのはな木々の木すへにさきみゝれたゆふれいのむめのはなしけみかゑたのはなさかりもかくやと思ひしられたり御うらしい木のもとよたちしのびちりゆく花をさうのたもとにうけとめてふるきしいりをおかめてたちたまふくいすのこゑにゆういんせられすいゑんにおるやさうはうひたおからきんのちらしれうらんたりへきやうの天とも詠てたゝれたりもへいつるくさのけふりにすへみたれれほろにかすむ春の夜の月とおかめてたゝれたりおりふし長しやのすみかみおみのつまとにあたりつゝつまおとやさしき琴のねの松ふくかせにひゝきつゝりん〳〵とぞれとつれける御そうしいきこしめゑいかおる人のひくやらんと心をとめてあやしく思召ことのねに心をひかれたつねよりて見たまへバこゝにふしぎ有あるしはたれともしらねども七間四面のやかた八むねつくりにけつこうしとうさいりうもんかさらせてつほのうちにはしゆもくせんさいかすゑらすのきはのかうバい心もことバもおよいれすひとへ櫻に八重櫻ゑたりやおきにふく春風いとゝ心もとちみたれいおもみちもつさかりみおみ

れもてのはなそのにゝまかきすきかきまはらにて月みんためのいをひさしはおみんための八重ひかきすはまに池をほらせつゝいけのおかにゝたて石ふせ石おかれ石佛をまおふらんかん石しやうわうしやくひやくこくといふ石の數をたゝませけるれし鳥かもめかいつふりがんかも水鳥かす〳〵のみつとりともゝきよきいさごにすみおれておほろ月夜のかけよりも身にしむはかりれもしろく池のおかにゝほうらいほうてうゑいしうとて三ッのしまをぞあらわしける嶋の内のけつかうにゝ百じゆの花をぞうへられけるこうばいはくばい八重さくらしら玉つはきいわつゝじほたんしやくやくかきつはたぎきやうかるかやおみなへし玄をんりんぞうわれもこうしらきくこうきくさま〳〵に幾年つもる万年卿おきをたよりにうきくさの月のかけをゝやとすらんひかしれもてのせんすいにゝからまつふし松でようの松ひくてにおひく子の日の松十六本うへられたりまつの木の間にはひわやこからや四十から花になれたるうくひすのさへつるふせひをこかねにてさま〳〵につくらせてうこくゝかりにすへさせたりきたのかたのせんすいにゝすみやくおきおかとしをへてかしらのゆきをゝらひておのかたもとはうすけれともふゆをまちたるやさしさよちやうせんてんにゝあらねとも四せつの四きをそまおゝれける百じゆの花のことおればつぼみてにれふ所もありちりゆくはおのこすへをも有わらしに花のさそわれてみきわのなみにうかみしを物によく〳〵たとふれゝ八くとくすいのいけのれもの百じゆまんしゆのほうれんげもいかてかこれにゝまさるへき嶋よりろくちのかよひ地にゝそりゝしをかけさせいけにはいろ〳〵のはちすをはなしたゆたふなみもゆふ〳〵としてみきわのまへにふくかせもしん〳〵と月すみてくじやくほうわうきりたけにまひあそびけれはさなからこくらくせかいもかくやらんとれほへける」

三たんめ

いろとのくわんけん

扨もそのゝち上るり御せんのおまへにゝおをも月のひかりやはおのなこりをおしくや思われけん心ありけの女房たち十二人召くせられくわんけんをはしめてあそゝれける上るり御せんゝ琴のやく月さへゝびはのやくれいせいとのゝひちりきのやく十五夜はゑやうのやくありあけゝわごんのやく又ほうきやうあわするものもあり時のちやうしゝひやうちやうなりあそはすかくゝおに〳〵そたいしやうもんしゆさうふれんしゆんれうりうにやかんかくしたいにひきよくをつくされける月せいさんにかたふけは口（不明）かのもかけもかすかよて花ゝ木の間にちりしきて色もにほひもみち〳〵てひわのねことの手すみわたりわくこうほんのふゝくもはれてこくらく玄やうともかくやらん天人もあまくたりほさつもこゝにやうこうおりと思しくてしるもしらぬもれしおゝてすいきのおんたをおがしつゝおみ袖をそゑぼりける御そうしのこゝろのうちたとへん方もなかりけり

四たんめ

ふへのたん

そののち御そうしゝまかきかとさまにたちしのびかくをそちやうもんめされけるあられもしろのくわんけんのねやうしわかみやこにありしとき一てう殿や二てう殿このゑくわんはくくわさんのいん六てういけ殿小松殿にてあまたのくわんけんきゝしかとひはのゞちれとことのつまれんせいいきさしほどひやうしいふにやさしくおほへたりかほどゆゝしきくわんけんおくかほどゆゝしきくわんけんはもふゑんかひとつさふろふおりふしんをいかにとたつぬるにふへのおきこそふしんおりふへかおふてふかぬかやふへはあれともふきてかおふしてふかぬかやふへもふきても候らへどもあつまのくわんけんのおらひにゝわさとふへをはふかぬかやそれいとものあれかくもあれよゑつね是にてすいさんなからかくに合せて一てふかんと思しめしみきのあわせの

たもとよりかのせみれれを取出しにしきのゆたんれし
はつしかんこしやうさくちうろくけくとて八ッのうた
くちとこあかの花の露にてうちしめしすてにふかんと
したまへしかけにやまことにわすれたりこれにてふへ
をふくおらいうちよりとかめさむろふへしそのときお
にとこたへんさんろかふきしくさかりふへとことふへ
しそれもとかめのあるおらはげんじぢうたいとも切丸
のこかねめくきのつゝかんほとゝたゝかふへしそれも
とかめのあるおらはによしかおんしをしのふかくおん
しかによしをこゆるかくきたのゝてんまん天神のおし
ませたまふそふゝれんとれやか子をたつぬるかく子い
またれやをたつねかねたるおらとうてんといふかくを
れおかおしてはふきもとしふきもとしてはふきかへし
うちのくわんけんにあわせつゝ三かわの國のやはきの
しゆくてうやのやみとものらいおれよとはんじほどこ
そふかれける」

文園

とら御前待宵のうらみ

去ほどに。虎御前。此程祐成打絶て。其音信もあらざれば。若や情のかわり行。事もやあらんと心憂く。松吹風の音までも。その方様のたよりかと。朝夕胸を焦さるゝ。此虎御前と申せおは。母の長者の其むかし。仇おる契りの色もれて。假にふし見の大納言關の東にさすらふて。名に流れたる川竹の。一夜の情よもふけたる。忘れ片身の姫おれい。春の梢に散りまがふ。花の吹雪や夜嵐に。明行く雲のうき枕。比翼連理の言の葉も。かれ〳〵におるさゝめ事。さゝの一夜の契りぞに。名殘のほどいあるものぞ。まして年月相馴て。一とせばかりあふのみか。二歳あまりあり〳〵て。いつか三とせの。おつ衣ひとへにとてそ。頼みつれ。君が心に秋の來て。虫の聲々物すごく。哀れ催ふす小田も

りの。庵淋しき閨の月。すむ甲斐もなき世の中の。戀のくれとやいつわりを。頼み顔あるうら情。向ひてこれは葛の葉の恨をいつか夕方の。さつき初の事あるに。南面の簾子近く欄干に立盡して。こあたばかりを打眺め。うわの空なる風だにも。松に音する。あちひあり。我待人は音信も。絶てなぎさの海人小舟こかれて物や思ふちん。涙爭ふ五月雨の。風より晴る雲間より。それとしもなき不如歸。只一聲を聞よりも。憂をとふかと思はれて。夏山に。啼くほとゝぎす心あらは。物思ふ身に聲あ聞せそと。うあたの空を打詠め。かこちわひてぞをいしける。

心中江戸三界

近松翁の作「伊達染手綱」の中に『山も見へざるかりろめに江戸三がいへ往んして』云々とある唄い「心中江戸三界と云ものにて其頃行はれし小唄あり左に之を記す

江戸へやりつゝ鹽ふませたら。末がよかろと皆云あいせ。すでに談合極りけれい。其方に逢ふのも今日明日ばかり。まめでつとめや煩やんあや。暇乞ぢやと涙でかたる。房は聞よりこい何事ぞ。私はつとめを明日止めうとも。まゝな身あれどこあさんに。逢ふがうれしゆふてうか〳〵と。つとめまするぞどうよくあ。江戸三界へゆかんして。いつもどらんす事じやゝら。山も見へざる假初に。つい馴れあじみ私をさて。どうせ女房にや持ちやさんすまい。いらぬものじやとおもへども。どうしたことのあんじやゝら。わするゝひまもないわいな。それをふりすて行ふとは。やりやしませんぞ手にかけて。ころしてれいてゆかんせあ。はなちはやらじと泣けれバ。男しばらく涙をながし。なじみもないにうれしやな。なんのわが身にいなれてれれが。何をたのみに行かうぞへの。そあた

ふりすて行く身でもあし。こよいこゝにていざ死なんとて。ついに房をはさしころしつゝ。ともに其身もあ野邊のつゆ」

義太夫雜誌の發行を祝して

よき友の出來て樂しゝ老の春　竹本綾瀨太夫
いろ〳〵のあり面白し花の山　播磨翁
春雨にむかしはあしや老の友　鶴澤友次郎
海原も世まき斗りや初日の出　紫雲堂主人
れ祝ひ申さんといれもへど拙き我あれは筆も動かす只でたらめを乍恐一寸　桑林軒畏雷
御祝儀と筆を採ては見たものゝ
腹にあけれはあにもでん〳〵　義太夫雜誌の表紙に八ッ手の
葉を画きあれは戯ふれに　竹の屋うのふ

羽團扇にあらぬ八ッ手の紋どころ
記者も木葉(此派)の天狗あるらん

東西 此團扇南北にも上る但世間の風の勢力に從ふ

近松戲文評(承前)　批評

惰農子

姫山姥(五百番之内)全篇は。賴光の逡巡退避を以て文となす。

第一段。惜らくゝ敵をうつ事早し

第二段。姫の奥へ入ところ。散しの妙を得たり。不如此則姥となる事あたはす。

第三段。美女御前以怯割愛　讀髻中書而始識其志一哀深於一哀。

第四段。山姥必ず奥を見まいぞと云。是安達原の怪胎也。

第五段。無味。

百合若大臣野守鏡。後世義太夫本の名に似たり。

第一段。第二段。さして評すべき事なし。

第三段。有馬湯處。此老本色。子竊父刀。使人感泣。別府殆死於浴室。忽如脱兎。奇々怪々

第四段。島中事妙々。鷹化爲女妙一層。母子情態。宛然如睹。俊寛島物語及道満大内鑑子別等。不能出於此範圍中。

第五段。僞盲女餘波可笑。

淀鯉出世瀧徳(小言詹々たる者)。

上巻。

「こゝぞうき世のたての大木戸。あけぬは銀のとがしの關。それつら〳〵れもんみれい。狂文。大じん客衆の秋の月は。小判の雲にひかりを傳。よひましや長へんじ。おどろかすべきよはもおし。

滑稽。新町橋のはしのうへ。はし辨慶が長刀の。さやをとしたるごとくにて。うろ〳〵として立たりしが。

下巻。妓東殺客藤五郎之條下。

詞「ヤァこりや。なんでころうう刀物がない。帶をといてしめころさうか。いやゆるりとする間は有まい。たば粉でふすべころさうか。醉ふてさきへこちがしおう。

評云。痴態妙々」

義太夫本作がらの事

翼々居士

義太夫の作りがらのよきものに時代違の入ごとあるは違憾おり。例へば「一の谷二段目」に薩摩守忠度がゆきくれて斗らずの菊の前が乳母の住家にやどる時に。乳母はやをが『マァはいつて煙草でも參ませ』と云ふ所あり

然るに煙草はポルトガル人が秀吉時代にアメリカより持ち來りたる者なれバ（微笑曰慶長十年にて今を去る二百八十九年前に初めて煙草長崎に植ゆ）源平頃にあきは必定あり。

「布引」に近江の國九郎助が左所の塲。百姓の噂に今年の綿も百目ぶきといふことあり。綿も元龜天正の頃舶來して三河の國に播きつけ。夫より廣りたるものなれば。是も時代ちがひ。（微笑曰「大和事始」によれは綿は延暦十八年則ち千百十二年に渡りしものと有りされは此説或は非か）

「安達原三段目」に袖萩は三味ひきとおつていで來るなれとも。三味線は前號よも見へたる如く。二百四十年前に初りたるものおれは。八幡太郎の時とは更に三百五六十年をへゞつ。是等の時代ちがひは。まさか作者の心つかざるにはあらざりをも。作したる時の聽衆に目先の者を見る樣に感ぜしむる爲にわざと。そうしたるやも知るべからずといへども。些實際を考へるものにはふつりあひなり。

義太夫謠曲の作に「忠臣講釋」の如く殆と實際に近くかき。又少しづゝの虚作を交へ興味を加へたるは。恰も刺肉の生まゝの鮮なる味に。辛き山葵や香き摘菊紫蘇又は防風などを添たる風情にて面白ろし。さりながら「講釋」よりも「假名手本」の方が多く世にもてはやさるゝは。先にできたる方が本家の樣に思はるゝが故なるべし假名手本の作穴ざらけ然も今に捨ぬは其肉の味也

義太夫本の作たるや。他の小説も一般にしてなきことも。ある樣に可成義理人情のいり組たる樣に書きたてたる上にも。猶舞臺の上のはれよき樣にするが肝心なるべし。故に「三十三間堂」おゞは柳の精人に化て一子までも產おしたりとは。今の實理主義の世の中には。ちとれかしきやうなれども。千載ふる大木を一飼鷹の爲に切り倒すも。あまり殘酷無慙なり。しかるを平太

郎が弓の手練其大柳を伐らずして鷹までも助たりとは適のはたらきのみならず。其千載の大樹を助けんの心根はいしくも又雅なれは。女姓ある柳の惚たと云も道理にこそ。又其一度救はれし由緒ある大木も天下の至尊の爲には材身を犧牲となすも恨なきとの作りやうは。曲作多きが中にも勝れたる者と云ふべし」。

俳句見立評

春曙山人

もの云へは唇寒しと合點しながら本誌の面白さに釣込れて記す人の尻馬に乘ぬれど雅事に疎き山人其當否は乍我知らずそんじよそこらの御贔負連讀て喜び玉ふとも怒り玉ふとも夫はれ心のまゝに候可祝。

仰き見る松を千歳の茂りかな　東玉

初ざくらこれに命を彫刻たり　綾之助

此里に此なかれあり梅やなぎ　小土佐

世の中は三日見ぬまに櫻かな　住之助

すゞみ臺のらぬ咄はなかり鳧　小清

青々とさくらのなかの柳かな　鶴蝶

とゞしりも額に見へる薺かな　越子

ほとゝぎす憚もおきからす哉　熊梅

夏瘦もねがひの中の一つかな　音女

味わいの夫々ありて木の實哉　素行

春もやゝ景色とゝおふ月と梅　駒之助

手をかけて折らて過行く槿哉　鹿の子

月も夜も長かれと照る櫻かな　稻桝

是は〳〵と斗り花のよしの山

「義太夫雜誌」

小川亭に行きて

笹木寸長

榮久は頗る美音家おりその音のすゞやかおると語りふりは綾之助に似たる所あれとも其聲綾よりは稍低し併

し技量に於ては綾の上ならむ次に目ぼしきものは幼年の播之助なり三絃の天軫はるか頭の上よあるも活潑に彈きこなし又大聲にて語りこなす有樣は眼前人おきが如し梅檀は二葉よりとかや今より愼むで技道練磨に怠りおくは後には恐るべき人とおらむ併し「嫗が餅」の舍利にて眼をむぎ賣婬の擬おどするは女子にはチト氣を付た方よろし薩摩芋は喰ぬ先から黃色のにほひすとの新聞屋の悪評をうけぬやう之れ我輩の老婆心偏に孃の父母に向て請ふ。

團平は慷慨家おり

義曲野史

團平師義太夫道の古實家三絃の無雙としては今天下に著しと雖も自ら足りとして誇る者に非ず猶其上も鍛錬し猶且斯道に改良を加へむとを望む有志家なり又中興斯道の衰頽を挽回せんと欲する慷慨家おり共故は予一日師の旅寓を訪ふに談殆ど半日に亘る中近時義太夫家が地位を墮せしとを歎き猶將來斯道改良のことに付て談ずに今の東京は　帝都なり殊にあまた文學音樂學士等もありて便利なり大坂に於ては其人に乏し尙當地に於も温古知新撓弊を主として將來の改良を圖らむと欲する人あれは住なれし浪華を離れ此に來も辞せずと喃此志あれはこそ此團平師。

演藝奬勵會の一口評

編輯の局にて机にもたれながら何がな面白き事もと考案の折トンと肩を打つものあるに振かへれバ壽樂子髯を捻つて立ちぬ何か用かと問へバ九日なりと洒落たりそれが御用おらばた歸りと筆を採かゝれは怒るは野甫これで笑顏を見せよと端して一枚の切符を置てゆきぬ手にとりて見れは十、十一、十二の三日間木挽町の厚生館に演藝奬勵會の催しあるゆへ來よとの券なり是は近頃面白しと

其晩は嬉しくて眠られず十日は忙はしくて往かれず十一日(紀元節)は酔つぶれて動かれず十二日に漸く行くことになりしも午後となりて三番ざけ聞漏せしは惜かりし。

七文字屋微笑

寶勝琴月(尺八)中山小登惠(琴)の「松づくし」はさしたる事なし琴の少し鈍く感せしは塲馴れざると年の若きゆへか○山下利助(薩摩琵琶)の「粟津の合戰」は毎もながら感服巴御前が袂別の一節思はず袖を濕すに至りたり此日張出に「宇治川先陣」とありしため中よは不思議に思ひし人もありし○竹本香朝(義太夫)野澤八兵衛(三味線の「先代萩政岡忠義の段」は餘程謹みて語りしものと見へ近頃になき大出來なりしが『モシ毒藥』と云ふ所を特に力を入れられしは耳障りなりし矢張毎もの如く語り來りて氣の付樣にせしならは如何三味線は實に達者なものなり○久保田梅樹社中(清樂合奏)の「三國誌」等は野暮の耳よはわからねど兎に角にぎやかなりし○竹本小土佐(義太夫)の「御所櫻辨慶上使」手に入たもの『ノヲ其御詞に及びませうか』と『其月よりも身も重く』と本に見當らぬ文字を二字までも入れたるは聞馴れぬ素人耳にはわかしく感すれど七五に注意する土佐太夫の門弟ざけやつてのけらるゝは感心乎○志津太夫(清元)梅治郎藤治郎(三味線)の「喜撰」十分と云ふ聲には非ざれども語り回しの工合などは只輕妙と云ふの外なし○荒木吉童(尺八)高橋榮松(三味線)の「鶴の巣籠」評するだけ野暮なり○竹本貴雀(義太夫)八兵衛(三味線)の「太功記尼崎の段」御苦勞と申まで因に云兄の貴寶は素人連でも大阪では小結ぐらいの語人此丈なれば「太十」は手のものなり兄の眞似はチト早し○大切惣掛合「七福神藝づくし」只賑はしきまでのこと云は景物同樣なれは語人にも身が入らねは聞人にも身が入らずザット騷てれしまい」。

因曰此日風は少々ありたれど日曜日の事ゆゑ去かは入りも可なりにありし。

饒舌（二）

七文屋微笑

竹本越子

越路太夫の一字を冠ると体度の活潑なるとに突出しの日より評判よく（書生間に）一時は飛ぶ鳥も落す勢なりしが此頃はとんと人氣も減たるは氣の毒なわけ連中の增加せし余響もあらんが一は客の耳が長ぜし故あらん藝は飛びはなれて巧妙と云ふ程になきため又之と云ふて指す所も餘なし只形容に勝が疵の孃をさして「オチヤッピー」と評するものあり微笑洋語を學ざれバ解する能ざるも「オチヤッピー」にして人氣を得るの獨參湯あらは可あり若し然らざるものとせば速に廢すべし」。

竹本清玉

容色と云ひ体度と云ひ腕前と云ひ中等あがらも平均に丸めし体あれば人氣も次第に多く正義派にては一二を爭ふ位置眞の價値は十分只瘠バりし聲の時々出るは耳障あり（孃チト無理な樣あ譯の樣あれと暫く孃と呼ぶ）此頃は少く高慢の氣味ありて折々仲間いさかいがあるとの事不平を云ふはまゞ〳〵早し只愛嬌々々然り愛嬌にて渡り玉へ慾のある身ではなし今が要なりなれども今少しく席亭を吟味すべし一体藝人は周施人の云ふ儘に使はるゝ弊あれど元來藝人が周施人を差圖する筈のもの其に使はるゝとは少し道が違はずや權理がなきと云ふもの是は孃に限りし譯あらねど序なバれ記す」。

雜録

孫福齋の觸書

牧野竹園

油屋の十人切にて三歲の童子にまでも知られし福岡貢（孫福齋の事）の事實を確むるに足るべき觸書なるものを一見せしかは記して貴社に投し同好の士に示さんと欲す餘白を玉はらバ幸甚。

一札

宇治浦田町
孫福九太夫悴
孫福齋

右之者昨四日夜古市町油屋清左衛門宅に於て清左衛門母親並に茶汲女及殺害ろの外の者へも手疵爲負逃去候趣き相聞候年齢廿四五歳に相見へ惣髪にて色白く柔和に相見え候右の者見當候はゞ早速捕押へ早々可申出万一隱し置後日に相顯るゝに於てはかくまい候ものは勿論其所役人共迄嚴敷咎申付候間町在裏家迄無油斷穿鑿可致候

五月五日

右御觸書の趣き承知仕候拙寺々内に右躰の者曾て隱し置不申候若隱ス置候て後日相知れ申候はゞ拙僧可爲越度候仍て差上申一札如件

寛政八丙辰年五月六日

寂照寺月仙　印

内宮御會合御衆中

寛政八年は今より九十八年前にて月仙は伊勢山田寂照寺の住職おりしと」。

播磨椽とシェークスピヤ

翼々居士

竹本播磨椽が「義太夫早合点」と云書に義太夫は謠曲より故に眞の景情をうたひ盡さんと思ふも牛の聲を牛の聲の樣に其まゝモーと謠ひては興さめて謠ふのいなしと見へたりいま之を思ひ合せは歐州にて著作王と唱へ演戲おどの種本となるシェークスピヤが書に鷲がまのあたりを飛過しといふ所にflapped（ばたゝと飛ぶ意なり）とはいはでunstled（絹などの摩れ合ふときにすゝゝと鳴る音を云）と云ひしは餘程鳶の飛行の勢見へて好し加らず句が雅おりと感せしことの有しが後の作者の參考にもと一筆しめしはべりぬ」。

竹本綾之助に就て

日本橋住人

余貴社發行の第一號を拜讀するに綾嬢に就ての好評感服す但し調節の乱雑なる云々は一應御尤に存ず併し諸家に渉り各家の長所を取りて已の一流を創立するは咎む可きに非ずして却て賞すべき技量と云べし（微笑曰一流創立の野心は今の腕前では早し〳〵）尤も乱心絨子（原書のまゝ也）が漫に湯武の放伐を以て折衷の材料とおすが如きは恐るべく悪むべきとおれども（余り比喩が大き過るかも知れず」微笑曰少しも解せず）高が知れたる義太夫節のことなれば唯悲しきに人を泣かせ可笑きに人を笑はすれば夫で充分と云ふべきか（微笑曰然り然れども悲きに人を笑はせる事なきか）而て見れは綾嬢の如きは各席ともに日夜大入拍手喝采の響の爲に麗音を聞に苦むが如きは大出來と稱して可おらん單に調節の乱雑を以て明玉の一瑕とおすは余り嚴刻（原書のまゝ也）の評にあらざるか（微笑曰調節は義太夫節の骨なりと知れ）猶末文に音次郎を愛する云々は頗る愛嬢家（微笑曰何ぞ僕と云はざる呵々）殊に熱心家の爲に御障りにならざるか願はくは此句は御除きありたし（微笑曰御心配御尤千万）然し綾嬢の品行を保証ずるにはあらず」。

義太夫に關する「イウフォニー」の事

鈎樂亭素樂

詞の圓活に聞ゆる樣に一語の中の假名の續き塩梅をよくそることを「イウフォニー」（euphony）といふ假令は「ニホヒ」と書ても「ニオイ」とひゞき「縁を引たる」といふ所にても「えんの引いたる」とンとヲの二字を一つに合せてンの一字に詰るの類なり其法則は一定の者なり義太夫の「イウフォニー」は梵字に因て其短縮方を調べたるものと見へて正しく語る人に在ては殊に正し之に就ても不審のあるときはロー字を以て書けばいつに

ても其不審を決すべし譬は(aiueo)の母韻の前には(ha hi hn he ho)の(h)は無響なり例は香。顔等の如し(n)のあとの(aiueo)は(n)を疊みてあとの(n)と一つになるなり假例は『爺さんは』といふことも『ローマ字にて(to-to-san-ha)と成り之を「イウフォニー」の例に依て(to-to-san-na)と變ず『天を』といふも(ten-o)とは響かず(ten-no)と響かしむるなり故にンのあとにアイウエオの母音を以て始る字あれは恩愛はオンナイといふ如くに響かすべ去乍去爰に一ッの例外のことあり忠臣藏の三段目に本藏が『天を拜し地を拜し、といふ所にてはテン、ヲ、ハイシ、チヲ、ハイシ、イとテンにて一つ切りヲはあとより別に云ひ出す節なり故にヲをノに變ずるの必要なしと知るへし乍去他の所にては矢張『テンノハイシ』と謠て可なり」。

演戯作柄のあと　岡田壽樂

壯士戯ゝいざ知らず歌舞伎の新狂言を演せんには先其作を義太夫の体に書上げ其上練磨すべし日本の戯は必しも義太夫と離るべからず倘離るれは風致を失はむ此程も[illegible]座の安政三つ組盃とかいふ狂言を見に行しに新聞の續き者を見る樣にもありて又落語家の人情譚を仕組たる樣にもありて風味も雅致も見へざりし其大略は維新前に秋田の藩士が穢多の捨子を夫とゝしらで拾ひとり育て上げしが成長の後は悪心を生し人を殺し其上も其穢多なるを既に知りながら産親の所より運動費を貰ひ江戸に來て上野の宮に仕へ立身して贅澤をせんと謀りしことが露はれて縛につくまでのことにて何の面白みもなかりき只見物は作の味あどいふ者もなく音羽屋とか何とか技方を譽る斗なり櫻痴居士ゝ此節梨園社會を益せらるゝことなきか今川竹本翁沒す將來の梨園は如何なり行ものにや

淨瑠璃外題集　加藤尾花

大關義經千本櫻前頭　産山權現誓助劔同
關脇北條時頼記同　傾城返魂香同
小結妹背山婦女庭訓同　伽羅先代萩同
前頭近江源氏先陣館同　出世太平記同
前頭源平布引瀧同　楠昔噺同
前頭檀浦兜軍記同　夏祭浪花鑑同
前頭那須與市西海硯同　伊達競阿國戲場同
前頭蘆屋道滿大内鑑同　伊賀越道中双六同
前頭太平記忠臣講釋同　姻袖鏡同
前頭義仲勳功記同　和田合戰女舞鶴同
前頭南蠻鐵後藤目貫同　釜淵双級巴同
前頭神靈矢口渡同　太平記菊水卷同

大關平假名盛衰記前頭　苅萱桑門同　有職鎌倉山
關脇一ノ谷嫩軍記同　義經腰越狀同　木下蔭狹間合戰
小結菅原傳授手習鑑同　加々見山舊錦繪同　花襷會稽掲布染
前頭本朝二十四孝同　由良湊千軒長者同　契清阿古屋松
前頭新薄雪物語同　碁太平記白石噺同　客競出入湊
前頭鬼一法眼三略卷同　小田舘双子日記同　八重霞浪花濱萩
前頭日高川入相花王同　古戰場鐘掛松同　軍法富士見西行
前頭奥州安達ヶ原同　大塔宮曦鎧同　花衣いろは縁記
前頭小野道風青柳硯同　川中島合戰同　三浦大助紅梅靭
前頭大内裏大友直鳥同　鎌倉三代記同　心中天網島
前頭十帖物源氏草太郎同　戀女房染分手綱同　攝津國女夫池
前頭伊賀越乘掛合羽同　糸櫻本丁云月同　女舞劔楓
前頭祇園祭禮信仰記同　心中雪虎中

爲御覽

行司　正德二年近松門左衛門　享保三年近松門左衛門

振袖天神記　人　日本振袖始　世話　並木宗助　近松門左衛門　竹田出雲　三好松洛　寄後三年奥州軍記　元　正德五年近松門左衛門　年前九年奥州軍記　勸　寛延元年竹田出雲　進　假名手本忠臣藏　國性爺合戰

蘭奢待新景圖　姫小松子日遊　敵討崇禪寺馬場　御所櫻堀川夜討　紅葉狩劔本地　敵討濫觴錦　姥山　出世景清　忠臣金短冊　傾城阿波鳴門　關取二代鑑　双蝶々曲輪日記　伊達娘戀緋鹿子　法恩日蓮記

道成寺現在鱗　關取千両幟　花筏流島　極彩色娘扇　近頃河原達引　二度目清書　時代織室町錦　比良嶽雪見陣立　讃州屏風浦　小夜中山鐘由來　姪小島武勇問答　後日菅原噺　傾城枕軍談　通失數四十七本　猿丸太夫鹿卷毫　佛御前扇軍　應神天皇八白幡

京羽二重娘形氣　加々國篠原合戰　石田詣將棊軍記　相生源氏　いろは藏三組盃

平家女護島　妹背の門松　祇園女御九重供養　攝州渡邊橋供養　妻重恨鮫鞘　立春姫小松　播州皿屋敷　新板歌祭文　傾城戀飛脚　攝津國長柄人柱　桂川連理柵　博多織戀錦　彫刻左小刀　章

小栗判官車海道　篠田妻今物語　破扇の軍　賴百合雅高屬軍記　源五兵衛薩摩歌　小まん三十石燈始　花景圖都鑑　將門冠合戰　万代廓　曾色　我上　實生源氏　丹州爺打栗　傾城扇富士　魁鐘　道中龜山噺　攝州合邦ヶ辻

此番附何年の版なるを知らずと雖も天保以前文化文政頃の印行物ならん

初め此番附を得るや何を票準として甲乙を別てるやを疑へり或は文章を以てせしかを然れども表中の文字或は外題等大に孟浪たるを見て以て撰者の必す美術的看察を以てせしものにはあらす只當時の評判に依りしものある事を知れり今日より見は最も杜撰の嫌ありと雖も又以て當時の人情如何を察するに足らんか」。

試に本誌の前途を筮す

不住居士

余一夜試「義太夫雑誌」の前途を筮したるに水澤節■■■■■■の兌爲澤に之に偶ふ蓋し節は生卦に於て本泰■■■■■■より來る泰は前低く後高くして既に高低の象あり と雖も未ゞ澤と水とを見す今來りて節となれは六五の一陰來りて三に居り兌悅の主とある九三の一陽往て五に居り坎水の主とある是れ澤を作りて水を入るゝ象なり蓋し水の澤に在るや其分量を得て止まる是則節なり若し澤水の分量節を失せは氾濫その害たるや甚し今人事に於てその節を解釋せは竹の節ある如く艱難多き時節あり併し竹は節あるか爲ゝ風雨の害を恐れず能く成長し得る如く世人も當時の坎難を堪忍して能く節義を守らは終に社會の信用を得平素の宿望も達し幸福の域に至るべし彼の「不遇蟠根錯節以不能爲利器」と之也。

夫れ絲竹の人情風俗教育等社會に影響を及すや大なり就中人心を感激せゝむる者は義太夫に如はなゝ從て其流行も亦他に比すべきなし然るゝ近時義太夫社會の内幕乱れて言聞に忍びざるとゝ之あり今や本誌此難局に當り該社會の利器たらんとするは則社會に對し節を守る澤にて創業坎難の多や知るべし乍然之卦兌爲澤は口を重ぬる象又悅を重ぬる象なれは終に社會の信用を得今日の坎難は兌悅の樂に變し宿望の迷雲飛散し好評

一陰來りて三に居り兌悅の主とおる九三の一陽往て五得今日の坎難は兌悅の樂に變し宿望の迷雲飛散し如

の旭日赫々たるに至るは斗大の印を捺して保証する所あり」。

義太夫語りの飲料

釣深亭主人

義太夫語は湯を飲を通例とすれども赤「ブドー酒」を適宜に水にて稀釋し白砂糖を甘く溶したるをよしとす長き語物をする時は大に呼吸機關の勞働を勵まし多量の炭素を費消するが故に血液中の炭素分を多く補ふ者を（可成は砂糖）飲食するを可とす然に炭素を多く含む者は澱粉油砂糖等なれども澱粉は酸敗しやすく油は胃中に消化せず故に砂糖を最も良とす是息を靜に強く長する法なり又ブドー酒は收斂の効ある故に咽喉の發音機を收縮し彈力を與ふ故に聲の涸れるを防ぎ且つ美あらしむ（尤も語る前に飲べし）酒きらひの人にはブドー酒も却て息をつめる故に宜からすと泰西の謠曲家の說を折衷しての或る大醫の話（微笑曰是に就き少く論あり次號に述べん）爰に可笑きは大阪の人が義太夫會の席に莅む時美人を携へて行ば聲の美麗になること妙ありとして若き語り人は皆この咀をする由（微笑曰女太夫の聲のわるき者には？）是多年の經驗にあらず習慣ありとかや扨も義太夫の本場たる浪華の地にもなにやらわからぬことのあるものかな」。

つねく草（二）

前號淨瑠璃の下或書曰の三字は冗字あり

峰の家主人

三郎が笛

本誌に續載する「上るり十二段ふへのだん」に『さんろがふきし草苅笛』云々とあり頃日「南留別志」（荻生徂徠著）を見しに左のことあり

三郎が笛とは玄宗皇帝の事なりいかに誤りてか敢笛の事にはしたり。

熊谷直實遁世

熊谷の直實出家して敦盛の菩提を吊ふと云ふこと、太宰德夫さへ實事と思ひ文にもかけり、僧圓識は長門の人なり其話に、大江廣元袖日記と云もの長門にあり、直實一族と田地の堺を爭そひ訟に及しに、直實口吃して對決に負けて其憤にたへず出家すと見ゆと」又考安云、法然上人傳記に、法然上人月輪殿にて經を講ぜしとき、供に候ぜし僧次の間にて欠伸す、月輪殿いまのあくびは坂東聲ありいかなる人ぞと問ひ給ふ、上人答へて、これは聞し召も及ばれ候はん熊谷二郎直實と申して弓取の剛の者に候ひしが、鎌倉殿に恨ありて遁世いたし申したるにて候と申さるゝとあるよし、其後東鑑を見しにかの事詳に載せたり、直實はきはめてあらあしき人と見えて、たばむこの直光と云ものと訟に及び、梶原平三が直光に黨するを憤りて訟の庭より逐電せしとあり。(筆のすさび)

秀吉公の御目のひかり

秀吉公いまゞ木下藤吉と云ときに大澤主水と鎗合はせし給ひしに、主水眼くらみて向ふ事能はずうつぶしたること、又羽柴筑前守の時に志豆が嶽にて佐久間玄蕃允をにらみ給へば、人馬ともにまゞゆくて跡じさりしつる事など、人のしりたる事なり、微忠録に秀吉容貌

矮陋、面色黎色、無異表、但、微覺目光閃々射人とあり。(かたひさし)

辨慶

辨慶は滑稽の男あり、むさし坊とつきたることは、辨の字をかたかゝにて、よめるゝるべし。(南留別志)

贔負

奇席戲場などの幕に此文字まゝ見當れり富士谷御杖が北邊隨筆に其由來見えたれゞ記す

道三國手のたゝれ歌とて人の語りつる「醫者はたゝ下手も上手もなかりけりひいきくに時のしわ

せしとおり。(筆のすさび)

は せとおん。げに志あらん人は必すいきぞほるべき世さまおりかし。ひいきといふに贔負の字を俗に用ふ。此文字文選西京ノ賦に「巨靈贔負とみえて注に作力貌とも。有力貌ともいへり。よく叶ひたる文字にこそ尺素往來に「奉行若耽賄賂令贔負一方者太以不當也とみゆ。然は贔負と云事ハ雅言也

雜報

○大隅太夫　病中なりしも岩佐國手の治療にて本服し熱海へも行れしが今は歸て新柳亭を勤らる大隅君萬歳

○鶴澤友次郎歸都　昨年高齡の姉と共に上京ゑたる同丈ハ本月上旬歸途よ就き播磨太夫も見送りとして京都へ同道し折て大阪にて一興行するとの噂

○淨瑠璃大會　本月中旬祇園新地藝妓連の催しよて淨瑠璃の大會を八坂女工場に開きたる由にて同日友次郎丈も臨席したりと。

○演藝奬勵會　去る十日より木挽町の厚生館に開かれたり委しき事は弊社の七文字屋主人か評に讃る。

○古河默阿彌翁逝く　近松以來の第一人と呼ばれし脚本家の名人默阿彌翁(本名吉村新七)は去る一月二十二日溘然長逝せられたり誠よ惜むべきことにこそ。

○新呂の又頓智　本月五日夜九段の青柳亭にて「伊勢れんぞ十人切」を人形に付て演じ居たるに蠟燭の火を過て暖簾よつくや否や活と天井へ燃上りたれはスハ火事よと見物が立上らんとする時恰も喜助が貢に意見を加へとする時なりしかは新呂太夫は直に『イヤもふし貢樣あなたにれ話が(折節火事だ)〳〵でざりますが一寸お待あされませアノ暖簾に火がつきましたあれ消まして』と吶ず早口にやりけれは使手もぬからず其人形喜助の手を以て暖簾を引ちぎり踏け揉つけて消とめそれよりゆる〳〵意見にかゝらんとして『モシ貢樣過ちとハ云あがら今夜に限りてこの暖簾に火のつきしハ何か凶事

ある兆ではあるまいかィヤ夫につけてもあなた様のれ身の上」とつなきければ誠左様に仕組みたる狂言の様にて見物も静まり中には其速智を感ぜし人もありて大受なりしは度々のれ手柄なり。

○醫者の昔は義太夫語り　變れバかはるもの此頃京都御幸町綾小路邊に開業せし或るれ醫者様は其以前故豊竹古靭太夫の門人よて靭茂太夫と云一時評判よかりた人ありと夫を聞て先斗町新地の連中は續々押かけるとか聞けりどちらへ轉んでも大當は結搆々々

女義太夫

五名家投票ゑ就て

前號に廣告せし以來引續投票有之廿日五時ゑ切り發表に着手仕候處　名望家　愛嬌家　に同點者有之候間更に右の二家に限り投票を募り次號に必發表仕候間來る十日午十二時限に到着候様御投票被下度此段廣告仕候

廿六年二月二十八日　七文字屋微笑

餘興曲子

三絃の友

題　女義太夫名前詠込

娯祝儀

○　深川　變木齊主人

添にや添はれず切るにや切れず義理と情の綾之助。

○　濱町　春の舎霞改　小松田紋太

ょッと笑ふたえくぼでたゝすこれもてくゞの綾之助。

○　土佐　巷地嫌人

小春げしきにふと誘はれてくるふこゝろの駒之助。

○　神田　並木狂生

つらい人目もよう〳〵越子嬉しふ二人が逢た首尾。

○　日本橋　茅の屋主人

來ぬ夜寫眞に云ふたる愚痴が届てうれしふ愛之助。

○　石川島　夢の家さむる

一二三と指折り數へてまてゞ此頃れ顔も見せぬ主。

○　神田　壽勝

何處にお出と見まわす一座いつか目と目が愛之助。

○　千住　船の家釣人

添ふて今日から氣も春之助世帶に一花咲くをまつ。

○　京橋　浦部不佛鬼

かけた願ひも今日隅清でうれしふ勤をひいた首尾。

○　本郷　突念坊菩提

飾つた若界の錦にまさる添ふて破れ衣着おがらも。

○　本郷　無雅句吐士

首尾も人目の關をば越子逢ふて嬉しふかたり合ふ。

○　一ッ橋　愛竹山人

立つた浮名を苦にした身さへ添へば心ろも住之助。

○　千住　浮世家夢輔

おのが影さへぬしかと見るば焦れ待夜の氣の清花。

○　本郷　梅痴

あんの鹿の子とその言わけは又も妾をだます氣か。

○　湯島　餘志亭朝臺

心の竹本つくせどぬしが邪見に小土佐ら苦勞する。

○　傾城窪　かむろ

待夜一二三と數ふる鐘のふけるほどなほ增す苦勞。

○　神田　美亭吳蘭

なぶるか窓うつ霰の音女待身に幾度もあけさせる。

○　本郷　無雅句吐士

逢て嬉ゑふ氣も住之助思ひのたけもとかたる今日。

○　陸中　酒家三里

案じて出先を問やはねつけて知ぬ小土佐と云憎さ。

○　小石川　二世　忍の家佳仙

主を便りのたづなも切れてくるふこゝろの駒之助。

○　本所　働亭雅升

いつそ勤の絹にもまさるこゝろに錦をかざる身ゝ。

○　湯島　二世　情亭歌升

こゝろの竹本盡した甲斐に兼ての願も今日鹿の子。

○　一ッ橋　愛竹山人

一重どころかぬしには八重子つくす實意のうら表。

　　琂舞内（本誌寄呈）

○　錦町　夜明亭主人

もらす初音よ客あし引くもうまいてくゞの綾之助。

粹多評　かゝらぬ樣に御用心〳〵。

○　天神下　葱山人

末をあんじて繰りや大吉と出るもうれしき三世相。

粹多評　これで病もれりました。

○　千葉　ゆかりのや

云ひたい小土佐〳〵人目の手前ジット奥歯で噛ゞる。

粹多評　心の内ぞせつなけれデンデン〳〵。

　　軸　係　粹多樂史

添ふて聞く身にや心にうれし語る太夫の名も千歳。

東西　今度は余程澤山の出吟あれ共餘白なければ是

東西　でぬはる事にしまゝた次回の課題は此下

●第三回情歌課題

亂題（義太夫座都紙世意大）の内一字結ひ

一名十首限り　入花あし

右は來る三月十五日堅く〆切一日も延引なく早々開卷の上三月發行の本誌に記載し三光の君へは本誌一部宛寄呈す延着ハ除卷

英文英書の飜譯

英文を和文に譯し和文を英譯する人多しといへども其意味を失はず其文法をあやまらずありふれたる語法（コロクキアル）に因てれかしからぬ樣に譯する人ハはゞ希なり廣告のちからに因て賣品の價値をたかめんとする人約定書の判明あらざるに因て將來の葛藤をおそる等の人は本社の事務所に照會あれ

義太夫雜誌第三號　三月三十日に　發兌

今度は各社の品物を各種に分け出版致しましたれば
でねはる事にしまゝた次回の課題は☞此下

府下

本誌賣捌所

神田區鍋町二十番地　清水嘉兵衛
仝美土代町四丁目五番地武藏屋支店
仝小川町一番地　松根堂
仝錦町一丁目十二番地　武藏屋
仝二丁目三番地　良故堂
仝小川町七番地　大塚
仝松住町三番地　坪井安太郎
仝裏神保町一番地　上田屋
仝　町　青柳堂
仝　町　寶山堂
仝南神保町　松江堂
仝一ッ橋通七番地　有斐閣
仝十五番地　春雲堂
仝今川小路一丁目五番地岩手屋
仝かじ町　清水屋
仝旅籠町一丁目廿二番地榎本
仝松富町四番地　芳壽堂
下谷區東黑門町五番地　三一堂
仝仲町　伏見屋
仝町　勝々堂
下谷平川町四番地　東永堂
下谷御徒町一丁目一番地永岡新助
仝　町　濟美堂
仝上車坂町廿五番地　金子もと
仝　町　寶永堂
本郷區元富士町　盛春堂
仝　解明堂
仝　思成堂
本郷三丁目十番地　龍本堂
仝眞砂町二番地　文壽堂
仝湯島六丁目廿五番地　遠州屋
日本橋區本町　庭花堂
仝通二丁目　丸龜
仝通リ三丁目　石じま
仝長谷川町一番地　金泉堂
仝人形町通　具足屋
仝長谷川町二十番地　松野米次郎
仝堺町九番地　平のや
仝人形町通　清水屋
仝カキ売町一丁目　伊勢屋
仝茅場町　三金
仝北島町二丁目十七番地旭堂
仝ヤゲン堀　鶴勇堂
仝兩國米澤町三丁目　むさしや
京橋區南傳馬町二丁目　柏屋
京橋區南傳馬町三丁目　河内屋
仝銀座二丁目　若狹屋
仝尾張町二丁目一番地　佐々木
仝出雲町　仝盛堂
仝　山田屋甚七
仝新ばし　伊勢一
仝八丁堀三角　大かつ
仝須賀町十六番地　柏原伊三郎
仝すゝ町十九番地　文花堂
仝並木町　萩山
仝町　三上
仝仲見世　大橋堂
仝馬道五丁目二番地　小野屋
芝區櫻田本郷町一番地　鈴木新兵衛
仝三田二丁目三番地　岸田書店
仝二丁目六番地　書彦堂
麻布區六本木町一番地　北原雜誌店
赤坂區新町二丁目二番地飯田三次郎
仝三丁目十三番地　赤川
四谷傳馬町三丁目五番地加藤清三郎
麹町區五番町六番地　文林堂
仝下六番町三番地　東山堂
仝九段坂上　昌盛堂

（余ハ次号ニ掲載）

逓信省認可

○正誤

本誌十六頁の終より四行目横文urstledハrustledの誤殖

○第壹號の考讀を指したる人は深川の變木齊碌々史馬鹿野郎(住所不詳)無名氏の四氏　即一も二も義太夫

告條

ちらし。口上がき。引ふゞ。おどゝ成るべくれもしろく。ことに目にたつようにまた。どゝ一。の名前よみこみ。ほつくの代さくも。いたゑ升。ハイわたくしが

義太夫雜誌社にて　峰のや

本社編輯部廣告

○可惜寄書の此貳號へ餘地なくして載せつくさず第三號へ讓候分は

竹本義太夫の傳　加藤尾花
豊竹若太夫の逸事幷評　團平
義太夫作者諸名家の逸事　服部露峰
團十郎宗十郎夜討曾我の爭評決　笹木寸長

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似の者ある時ハ其優れたる者を掲載す○次號に讓し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時ハ之を省く○誌上ハ匿名あるも投書に住所姓名あき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とゑ判明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書ハ返却せず○問合せは往復はがきか又ハ郵券封入の事

社告

本誌定價　一部三錢五厘　前金の分は本社へ
地方は一部に付郵送費五厘申受く
廣告料　一行二十四字詰四錢十行以上一割引
但し　義太夫謠曲に關する者に限り三割引とす
代金爲替一圓以下ハ郵便切手にて宜敷以上は神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

發行所　東京市神田區紺屋町四十四番地　義太夫雜誌社
發行兼編輯人　東京市神田區紺屋町四十四地　岡田廉二
印刷者　仝市下谷區御徒町三丁目百一番地　奥山東太郎